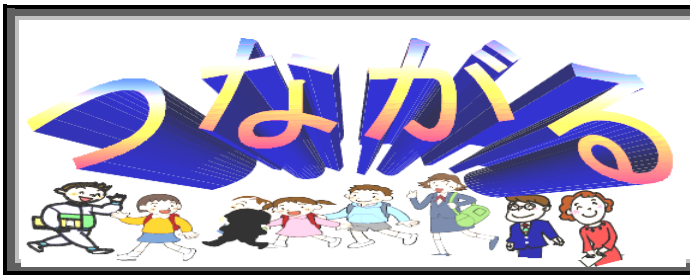


小中一貫教育だより
学校教育課・教育センター版
令和２年１月31日　　№22
（小中一貫教育推進だよりから 通算№93）
十日町市教育委員会学校教育課

松代中学校区　一日体験入学・部活動体験　※Ｐ10 で説明

スラムダンクから考える自己有用感と自己肯定感

学校教育課学事係　髙澤　剛

小中一貫教育のキーワードに「自己有用感」があります。

この「自己有用感」と似た言葉で「自己肯定感」がありますが、違いが分かりづらいため、スポーツ漫画の金字塔「スラムダンク」の登場人物「三井寿」に当てはめながら整理したいと思います。

ここで、自己有用感と自己肯定感の４つの組み合わせパターンで考えてみます。

①自己有用感【低】、自己肯定感【低】

自分は、ダメな人間だ。周囲からも期待されていないだろう。このままここにいたら、迷惑をかけてしまう。⇒中学 MVP を獲得し、スーパースターとして入部したにもかかわらず、ケガで同期の赤木に差を付けられ、次第にバスケ部から遠ざかっていったときの三井です。

②自己有用感【高】、自己肯定感【低】

自分は、大した人間でもないのに、何とかうまくやってこれた。周囲の皆さんのおかげだ。⇒全盛期の実力を取り戻しているのに、不良時代のムダな時間を過ごしたことを後悔し、自分を肯定する感情がないときの三井です。

③自己有用感【低】、自己肯定感【高】

自分は、能力は高く成果も上げているのに、周りは認めてくれない。そもそも世の中が悪い。⇒過去にこだわり、バスケ部に対して屈折した思いを抱き、他人の責任にしていた不良時代の三井です。

④自己有用感【高】、自己肯定感【高】

自分が成果を出せたのは周囲のサポートのおかげ。今度は自分が周囲の力になれると思う。⇒チームメートの支えがあって完全復活し、恩師である安西先生のために頑張りたい感情が芽生えたときの三井です。

安西先生が活躍の場を与え（居場所づくり）、見守り、やり遂げさせることで達成感を味わわせ、試合を重ねるたびに三井自身が他の部員との絆を感じ取り（絆づくり）、自分自身に自信をもつことで（自己有用感の高揚）、湘北バスケ部に欠かすことのできない選手になりました。何気ない一言が、相手を傷つけたり、その気にさせたり・・・その時の状況に応じた声掛けが大切だと感じました。

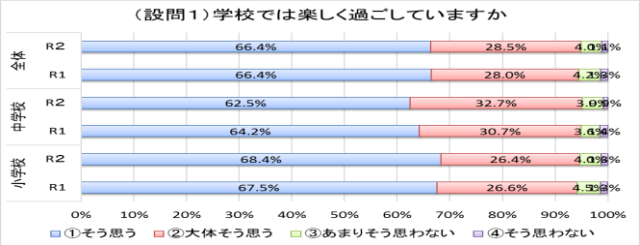
小中一貫教育

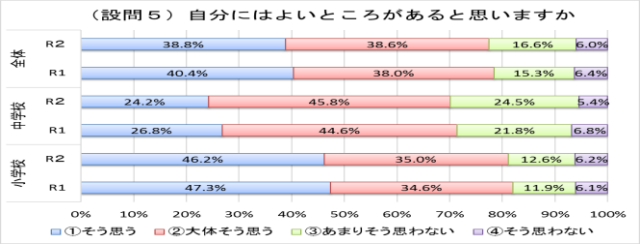
■　令和2年度　小中一貫教育取組評価アンケート結果　一部（速報）

今年度は、新型コロナウイルス感染防止のために、学習や活動の制限や中止せざるおえない行事等があり、昨年度との取組で比較はできないものもあります。しかし、全体的には、昨年度とほぼ同程度の結果が見られたと捉えています。コロナ禍での取組の成果ではないかと考えます。ここでは、特徴的な市全体の傾向の一部を紹介します。

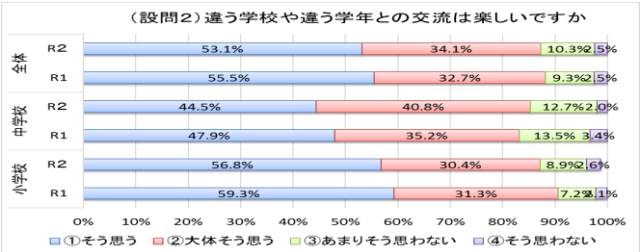
【児童生徒アンケート】

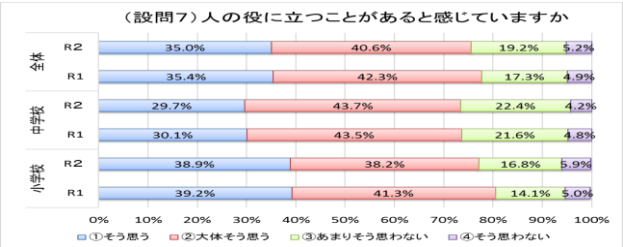
成果：昨年度との比較で、アンケート項目１「学校では楽しく過ごしていますか」、項目５「自分にはよいところがあると思いますか」は、数値ではほぼ変化はありませんが、アンケート実施時の経年比較（H26 又は H29）では少し高まっています。また、ここには示していませんが、設問６「あなたが住む地域や十日町市が好きですか」、設問８「家や塾での学習をしていますか」についても同様な結果が見られます。コロナ禍で学習や活動の制限があったことを考えると、各学校が感染予防対策等を取る中で、工夫と努力により取り組んだ大きな成果であると考えています。



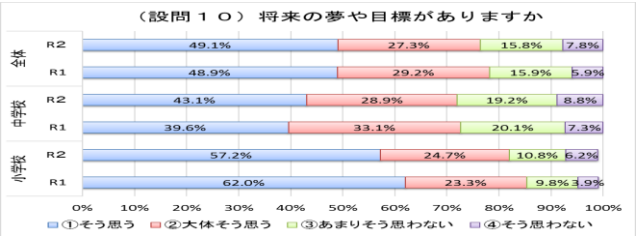


課題：設問２「違う学校や違う学年との交流は楽しいですか」については、昨年度より肯定的評価が下がり、経年比較でも下がっています。また、設問７「人の役に立つことがあると感じていますか」も低下し、特に中学生でその傾向が強く見られました。コロナ禍で活動が中止や縮小されたことの影響があるものと思われます。反面これまでの活動は児童生徒にとって意義があったとも考えられます。

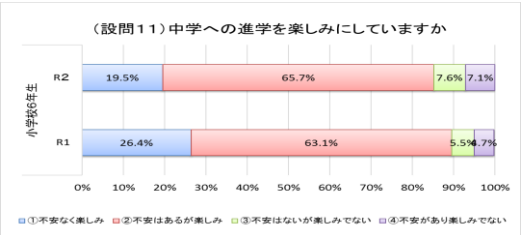




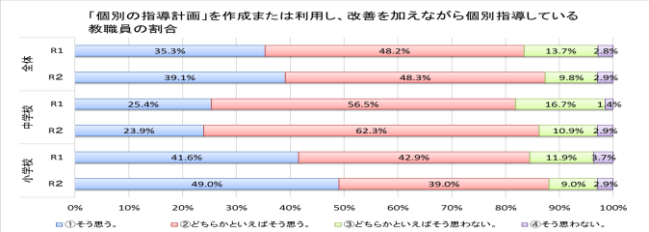
設問 10「将来の夢や希望がありますか」については、昨年度よりも低下し、経年比較でも低下し、大きな課題です。新学習指導要領の実施を踏まえ、キャリア教育や全教育活動の中での取組が必要と考えられます。

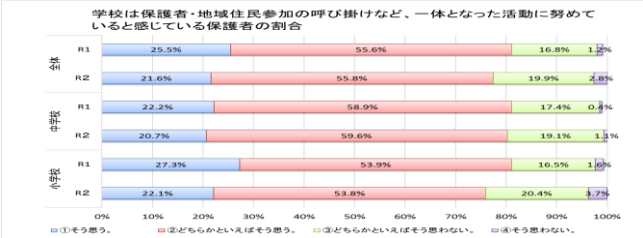


設問 11「中学への進学を楽しみにしていますか」については、昨年度より低下し、経年比較でも低下しています。学校区によっては低下が大きいところもあります。卒業前に児童一人一人の不安や悩みに寄り添うことも必要です。



【教職員・保護者アンケート】





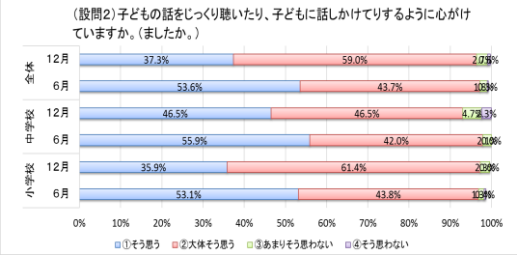
成果：教職員アンケートの「『個別の指導計画』の作成・活用や改善」の意識が高まり、特に中学校で高まりました。教職員全員で計画を検討する学校もあり、その成果と考えられます。今後も学校体制で全職員での取り組みをお願いします。

課題：保護者アンケートの「学校は保護者・地域住民参加の呼びかけなど、一体となった活動に努めていると感じる保護者の割合」が低下しました。コロナ禍でボランティアの活用や地域に出かける学習の制約もあったことが影響していると思われます。今後、コロナ禍での学習活動や保護者・地域との連携・協力体制の在り方を考える必要があります。

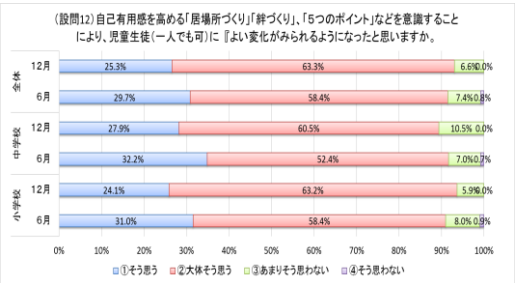
■ 「児童生徒の自己有用感を高める教職員意識調査結果」報告

小中一貫教育の共通取組事項として３年目となる「児童生徒の自己有用感を高めること」について、教職員の取組に関する意識調査を６月と12月に実施しました。その結果の一部について報告します。

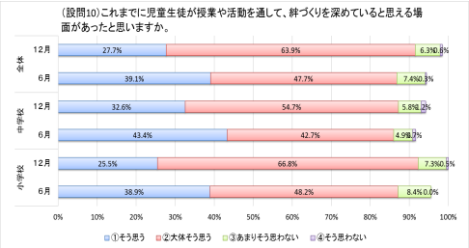
注１：６月の調査は主に前年度の取組の意識（適合度）、12月の調査は実施後の実現度の評価を聞いたものです。
注２：100%にならないのは無答等によるもの。



教職員の児童生徒の自己有用感を高めるための取組意識については、設問２「子どもの話をじっくり聴いたり、子どもに話しかけたりするように心がけていますか。（いましたか）」などの児童生徒とのかかわり方について「そう思う」「だいたいそう思う」の肯定的評価は、12項目中11項目で80%以上（内、８項目で90%以上）と高いことが分かりました。一方で、６月と12月の比較では、12月の「そう思う」の強い肯定的評価が低い傾向が見られました。これは、６月の評価は過去の取組の適合度に対し、12月の評価は達成度であるため一概に比較はできませんが、具体的に取り組むことの難しさの現れであると思われます。



また、設問10「これまでに児童生徒が授業や活動を通して絆づくりを深めていると思える場面があったと思いますか」については、肯定的評価が高まりました。この３年間、各学校や中学校区で「居場所づくり」「絆づくり」に取り組んできた成果であると捉えています。



今後は、より児童生徒が他者との関係において「役に立っている（貢献）」「認められている（承認）」「必要とされている（存在感）」という感覚がもてる働きかけとかかわり方を高めることが大切です。そして、教職員の意識がアンケート項目にある取組の強い肯定的評価「そう思う」が高くなることが必要です。そのために、教職員同士が取組を共有し、実践を踏まえながら教師力を高めていくことが欠かせません。

教育相談班より

■ 不登校　小学校が昨年度同時期比で倍増、中学校は大きく増加

年間30日以上不登校により欠席した児童生徒の割合は、令和２年12月末と昨年度同時期、昨年度末の数値を見ると、小学校、中学校とも大きく増加傾向という状況にあります。

不登校出現率（令和２年12月末時点）
- 小学校　0.９０%⬆（昨年度12月末0.59%、昨年度末0.85%）
- 中学校　3.６８%⬆（昨年度12月末2.10%、昨年度末2.51%）
- 小中校　1.８６%⬆（昨年度12月末1.11%、昨年度末1.42%）

一人一人の状況（不登校リスク等）を丁寧に分析し、新規不登校者を出さないように校内での情報共有・支援会議を充実させ、家庭と協力して取組を進めていく必要があります。また、子どもの「居場所づくり」「絆づくり」など自己有用感を高める取組の推進、不登校の状況改善や自立支援に向け関係機関（にこやかルーム等）との連携を強化していくことが大切です。

今後も子どもたちの小さな変化に目を向け、気になる子どもへはきめ細やかに組織としてスピード感をもった対応を進めること、そのために「不登校予防のための早期対応マニュアル（令和元年８月改訂版）」の積極的な活用をお願いします。

■ いじめ　認知件数、小中学校とも昨年度同時期比で増加

12月現在でのいじめの認知件数は、昨年度と比べて小学校は微増、中学校は大幅増の傾向にあります。

令和元年12月末（令和元年度末総件数）→令和２年12月末
小学校６９件（７９件）→７１件　　中学校４９件（６３件）→６５件

これは、積極的ないじめの認知を行った結果であり、小さないじめも早期に発見し、対応してきている結果です。態様は、冷やかし、からかい、いたずら、仲間外しなどが多く見られ、大人の目が届かない時間帯や場所で多く発生していることが特徴です。中にはＳＮＳ（ライン）による誹謗中傷など、いじめが表面化しづらく重大な事態につながる恐れのあるものもあります。今後も未然防止、早期発見、即時対応のため、常日頃から小さなことでも情報共有しながら、生徒指導体制の構築と見直しを図っていく必要があります。

そのためには、いじめをみんなで力を合わせて撲滅していく体制作り、取組が大切です。学校のいじめ対応の在り方をより実効性のあるものに改善していくために、**以下の点について再度徹底願います。**

- ○　『県いじめ等防止のための資料集』『県いじめ対応総合マニュアル』を積極的に活用し、組織の対応力を向上させる。（速やかな事実確認の徹底と市教育委員会への報告、被害者のケアと保護者への説明と謝罪、加害者の心情理解に基づく再発防止策と保護者への説明、情報管理の徹底など、組織として迅速で丁寧な初期対応　等）
- ○　県の通知で示されたチェック表を活用して、『学校いじめ防止基本方針』の見直し改善を行う。
- ○　学校ホームページに「学校いじめ防止基本方針」を掲載したり、学校だより等で周知したりする。
- ○　月例報告で「いじめ認知ゼロ」の学校は、必ず保護者に便り等で周知、確認する。

■　特別支援教育研修講座が終了

１月20日（水）、令和２年度最後の「第６回特別支援教育研修講座」をふれあいの丘支援学校 山田 聡教頭を講師に千手中央コミュニティーセンターで開催しました。今回の特別支援教育コーディネーター向け研修は、学校の特別支援教育を中心となって支えてきた先生方にとって、振り返りと今後の方向性の自覚、他校の取組を学ぶ機会になりました。

今回で今年度の特別支援教育研修講座が全て終了しました。今年度は、ふれあいの丘支援学校 小網輝夫校長を中心に行った研修コーディネートにより、ふれあいの丘支援学校のセンター的機能、及び特別支援教育研修の充実に結び付きました。ご指導いただいた講師、参加いただいた先生方に深く感謝いたします。

■　今年度の市の特別支援教育の成果と課題

今年度の市の特別支援教育全体を振り返ると、主な成果と課題は以下のとおりです。

・成果⇒ 中学校通級指導教室が４月から開室し、特別な支援を要する中学生への教育支援の充実が図られてきている。また、特別支援教育コーディネーターが中心となり、校内支援委員会を機能させながら全校体制で取り組む学校が増えてきた。

・課題⇒ 学校により、温度差が見られる。全職員の特別支援教育への理解と意識改革を進めていく必要がある。（その子にとって必要な支援【自立活動】を、特別支援学級で必ず行うこと。特別支援学級は、単なる補充学習の場ではない。）

※『特別支援学級ガイドライン』（平成24年度版、令和２年度版　県教委HP）を参照

成果と課題を踏まえ、以下について取組の努力をお願いします。

◎　「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」は、可能な限り本人と保護者が参画し、定期的に見直す。本人の学習、生活面の成果と課題を定期的に保護者と共有し、保護者と協力して指導していく。

◎　通常学級内の特別な支援を要する児童生徒（いわゆるグレーゾーンの子）について、一人一人の状況をよく見て、指導に当たる。（子どもにあった指導を丁寧に行う）

・　特別な支援を要する新入学児童、中学校へ進学する生徒については、管理職、特別支援教育コーディネーターと保護者とで事前に面談し、必要な支援体制を整えておく。

・　市発達支援センター（「おひさま」）利用の新入学児童の保護者は、「おひさま」から渡される「相談支援ファイル」を所有している。保護者の了解を得て、情報として活用する。

◎　全教職員の特別支援教育への深い知識・理解を高めるため、校内外を問わず年に最低１回以上は全教職員が研修機会を得る。

■保幼小連携合同研修会（12 月4日(金)）
園と小とが連携のあり方について協議を深めました！

千手中央コミュニティーセンター「千年の森ホール」において、保育園関係者（管理職、年長担任等）39 名、小学校関係者（管理職、1 年担任等）31 名、合わせて 70 名が参加して『保幼小連携合同研修会』を開催しました。今年度は一昨年度同様、保育園と小学校の関係者とが顔をつき合わせて保幼小連携のあり方を考えるグループワークをメインとした研修を行いました。小学校区を原則としたグループに分かれ、「切れ目のない円滑な保幼小連携の推進を図るためにどうすればよいか」という共通議題のもと、現在の保幼小連携の課題や解決のための方策について、互いに付箋紙に書き込み、模造紙に貼り付けながら協議を深めました。

今後も保幼小の連携強化が図られるように研修の充実を図っていきます。

学習指導班より

■　学習指導班事業　事業評価から

今年度の学習指導班事業の事業評価への協力ありがとうございました。結果を真摯に受け止め、学校現場のニーズや負担感等を考慮しながら、来年度もより一層先生方と児童生徒のためになる研修機会の提供に努めていきます。

■　新年度4月の2つの学力テスト・調査に向けて

３学期に入り各校では、今年度の学習のまとめに向けて取り組んだり、準備を始めたりしていることと思います。

例年どおり、新年度１学期には、ＮＲＴ学力テスト（４月中：小学２～６年、中学１～３年）と全国学力・学習状況調査（５月 27 日（木）：小学６年国語・算数、中学３年国語・数学）が予定されています。

今年度、様々な機会で説明してきたように、特にＮＲＴ学力テストでは、小学校において４年連続の低下傾向となり、市の目標値 53.0 に届かない状況が続いています。児童生徒の「学力」という場合、数値で測ることのできるのは「学力」の一部であると考えます。その学習の学び方を学ぶ楽しさや学習意欲なども含めて、真の学力であると言えます。しかしながら、数値の部分、つまり結果が求められることもまた確かです。

各校で、今年度４月のＮＲＴの結果を踏まえ、今年度の学習内容については児童生徒の実態に応じて適切かつ確実に指導するようお願いします。

学校教育課・教育センター事業のお知らせ　～2・3月～

日程	内容【会場】	備考
2月 12 日(金) 15:30～16:30	第3回学力向上推進会議 【千手中央コミュニティーセンター】	講師:市教育センター指導主事　他 対象:研究主任、学力向上担当者
2月 18 日(木) 14:00～15:30	英語・外国語活動授業力養成講座 【千手中央コミュニティーセンター】	講師:新潟大学 教授　加藤　茂夫　様 対象:英語・外国語活動担当者　他
2月 18 日(木) 15:45～16:30	ALT 学校派遣事業担当者会議 【千手中央コミュニティーセンター】	対象:英語教育・ALT 担当者

【表紙写真の説明】

昨年10月に松代中学校区で行われた中学校体験入学での授業体験と部活動体験の様子です。授業では、小学生６年と中学生１年生が一緒に体育の授業を行いました。体育教師による中学校の雰囲気を感じる授業が進められ、小中学生が一緒の班を作って共に活動する場面がありました。小６と中１という近い関係もあり、和やかな雰囲気の中で体つくり運動を行っていました。部活動体験では、中学生が部長を中心に生徒が主体となって活動を進め、小学生に丁寧に説明し、優しく教える姿が見られました。また、各部が来年度の新入部員獲得の意気込みが感じられました。

他の学校区においても同様な取組を行っており、同じようなことを感じました。